

請假赴温泉

〔帝王編年記二十〕文永四年九月十三日、一院新院、御幸吹田、新院於吹田、可被召有馬湯云々、

〔鹽尻二十八〕一攝州有馬山温泉、我國他に異なる名湯也、中當山の鎮守は、麻古三輪の二社也、仁

西熊野の祠を建そへけるとぞ、夫三輪は大汝の命にて、我醫業の祖也、ける、湯の山の神なる事は

神記に見へ侍る、略、中後奈良院も御幸まし、くけるとかや、略、下

〔朝野群載二十〕向温泉人官府

太政官符 太宰府

應聽往還其姓某丸向其國温泉事

右得某人解稱云々者、其宣奉勅依請者、府宜承知依宣施行、符到奉行、

辨 史

年月日

一説云、宣奉勅、宜聽往還、府宜承知依宣行之、路次國且宜准此符到奉行、

〔東大寺正倉院文書十七〕駿河國天平九年正稅帳

依病下野國那須湯從四位下小野朝臣、上從十二口、六郡別一日食爲單漆拾捌日、上從十二口

〔扶桑略記二十五〕天曆七年三月廿日己亥、權少僧都明珍、申給官符向伊豫國温泉治病、

〔集古文書四十九〕天文六年過書、所藏不詳

湯治人數十七人、荷物壹荷在之事、上下口口無其煩、可有勘過狀如件、

天文六 八月二十七日

長隆

城州攝州

諸役所中

〔憲教類典二ノ九〕寛文八戊申年二月廿日